

採る 獲る 捕る

ワラビの採り方

そしてね、こっち方の人たち、ワラビ採るときい、三十センチだら三十センチの高さで採るわけね。ほいつね、おらたちは、長（なんげ）のはこんな長（なんげ）く採るわけさ。短けのはこゆぐ採るわけね。だら、ジグダグ、うんどあんのさあ。「升沢から色麻まで長（なんげ）く採ってくるう」って怒（おご）らったんだ。それからあ、やっぱりい、すっかりは揃わねえけどお、あんまりい、うっんど長（なんげ）くも採んねえし、この位だらこのぐらいに。

（『升沢にくらす』 p.246）

魚とくらす

おれ、野郎（やろ）っこのころから、魚捕り好きだったのね。二股になってる川や沢の一方止めて、水干して、してヤスで突いで捕ったの。けっこう捕れたのね。むかし、大っきいんだとね、一貫目あるマスが来てたのしゃ。それ捕り方は、面白（おもしろ）くて捕ってあったんだ。

魚あ好きだったんだよね。

で、ごこの沢水あるもんだから、ニジマスつつの、かなり大っきくなるつつの聞いたもんだから、「どのくれえ大っきぐなんのかなあ」って、池作（つぐ）って飼って見たのしゃ。飼ってみだどこ、百グラムの稚魚が一年で二キロなったね。それからだんだん、魚増やしで、して釣り堀始まったのさ。で釣り堀したら、けっこういっぱい売れっから、養殖場から買ってきて売ったの。十年くれえ。

このあたり、炭焼きやパルプ材伐りが下火できた時、山のスギ植えて山仕事した、みな共同で。そんな時考えたんだ、「おれ、釣り堀した方がいい」って。で、その団体から抜けて、個人事業、釣り堀專業始まった。あど、あんまり魚売れなくなると、吉田財産区から土地借りて、池作って、養殖始まったんだ。

苦勞したつつのは、やっぱり台風ん時、水増えで、ごみ流ってきてえ、そのごみ除けっのに、夜でも昼でも付いてねくてね。三十分でも池に新しい水入れねえと、魚死ぬんだっちゃ、全滅。もう1トン位、殺したこともあっけど。付いてねくたって、三十分おきに池に行かなくてねえわけさ。行ったり来たりして、寝らんねえからね、一晚。それが一番、苦勞でねえべかな。

（『升沢にくらす』 p.297）

ホヤとヤマドリ

おらは、なんぼ、高等科卒業すつと、そうゆ、悪戯はしたんだ。あのね、村田銃つ、筒の長いやつね、単発のやつ。そいづさほれ、鉛の散弾詰めで。

じきい、うちの前（めえ）にね、こゆ太いクリの木あったんですよ。ちょうどね、雪（ゆぎ）降って、一月、ほの木さホヤ（ヤドリギ）つぐわけね。そいづさ実なるわけね。そいづ、ほれ、ヤマドリが食いに来で、つぐわけ。そして、その太い木のね、そばさ雪囲いしで、朝に、ちょうど、ほのぼの明けあたり、鳥来んので、そごで隠れて待ってるわけっしや、全部支度（しだく）、寒ぐねえようにしで。

お正月の八日（ようか）の晩に、お精進上げつつのするんですよ。男人（おどこひ）たちみな寄ってね、一晚寝ねえで、花札だのね。寝ねえでっから、朝早くそごさ行っては、あと、鳥獲りしでね。

ヤマドリつつうのね、歩いてくんです、ポッポッポッてね、ほごの木の側（そば）まで。そして飛び上がんですね。で、一回、ホヤさ入（へえ）る手前（てめえ）の枝に、止まんですよ、そん時撃（ぶ）つ。しで、あとほれ、雪の中さ刺さってっからは。（続くヤマドリも）逃げねんだね。だから私、真鍮のケース五本持ってって、五羽、一朝にね、獲ってきたの。うん、十二羽来だのね。だからもっと弾持ってけば、撃（ぶ）つにいがったんだけど、弾無くなっだからねは。

（『升沢にくらす』 p.255）

クマを撃って自転車を

鉄砲撃（ぶ）ちの手柄話って、熊撃（ぶ）った時な。

おれ、二十歳（はだち）ころかなあ、親父にもらった村田銃持って、犬、連（ちえ）でって、ほれ、北泉の陰さ来たれば、犬、大っきな声（こい）で、吠え始まったのさな。なんだも大っきな声（こい）で吠えんだな。したら、こいな太っとい木の根っこに、野郎（熊）いて、ベローンと出はったんだもなや。しだっけさあ、なんだっけ、まっすぐ降りて来たんだ、こんど。こっちぶつかるよにさあ。

野郎（やろ）っこだしさ、おれ。うん、熊撃（ぶ）ったこどもねえしきは。なんだ、首っ骨（ぼね）が一番いいんだっつてが、首っ骨ためて、撃（ぶ）ったけ、鳴ったんだな。肩鉄砲や。したっけ、前の方潰れたんだやあ、熊。で沢さまくれでって、ガリガリ噛ぶついで、「アーッ」つど、雪真っ白で、体真っ黒だっちゃ。口は真っ赤で「アーッ」つで。声（こい）聞きたぐねえから、こんだ鼻つつらさ一つおっつけで。こんだ声出なくなったわ。んだけっど、動（いご）かねえんだなあ、沢だから。しゃあねえから、来たっちゃわ、置いて。

種沢さ出はったっけえ、「やあ、熊撃（ぶ）ってきたわ」っても、みな本気（ほ）にしなくでさあ。で、親父もさあ、「なーんだか、持って来ねえうちは、真実（ほん）でねえど」って。おれの小（ちっちゃ）こい舎弟野郎（しゃでえやろ）どもさ、五人で馳しええて、引っ張ってきたおな。親父、「この野郎（やろ）、おっかなかったべな」つったっけ。

なんだも大っきい熊で、肉ばりで二十四貫、皮量って、骨量つと、三十九貫なんぼあったな。いやあ、野郎ども、うんと食ったんだ、熊肉。おれは熊の胆、自転車と取替（とっけ）えて、やっど自転車求（もど）めたのさ。おれ、野郎（やろ）っこの時だから、うんど欲しいかっだから。うん、最初で最後の熊だったの。手柄話って、ほんなぐらいなもんだなあ。

（『升沢にくらす』 p.259）

ウサギヤマ

鉄砲撃ちは、峰に、見えるとっさ行って、好塩梅（いあんべえ）間隔で立つでるわけしゃ。ほいづ、下から勢子（しえご）が、好塩梅（いあんべえ）並んで、みんなして「ほーう、ほう」って騒いで、ウサギ追（ぼ）ってぐわけしゃ。「ほーう、ほう」つったり、「ほうりゃー、ほうりゃー」つたり。すどほれえ、ウサギ豊富（ふだ）だったから、馳しえでいぐの、見いるわけさ。「ほら行ったどおー、行ったどおー」なんていうの、あいづ、ダダーン、ダダーンど撃（ぶ）って。

ほれえ、勢子（しえご）お、追（ぼ）ってよごすの、ウサギもボンボン馳しえでくつかあしゃあ。峰っこさ行って立ってでや、ウサギ馳しえできだのやあ。こう、峰っこ、ボーンと越えでくところ、陰え見えねえのしゃ、ほれ、崖で。跳ねあがってきだん、ためて撃（ぶ）ったの、死んだか当だったか、分かんねえのさは。で行ってみたっけ、当だって死んでたんだっけや。あいづなんか、よぐ当だったなあと思って。頼まれでは行かんねえ。ほゆの面白（おもしえ）えがら行くんだ。

むかし、うちの前（めえ）あだりだって、雪降っと、ウサギの歩った跡、いっぺえ、つかかったもん。つかんねかったっちゃ、今は。生き物少（すぐ）ねくなって、はっぱり面白（おもしえ）ぐねくなつたから、鉄砲止めたのしゃは。

（『升沢にくらす』 p.264）

山でよし川でよし

旦那は、辛抱した人なんだよお、この人。うん、家思いの人でね。親思いで。この人ぐれえだべよお。二十九の歳まで実家を助（す）けたっつもの。

まあほんとに、なんでも山は好き。鉄砲はしねかったけど、なあんでも好きなの。魚捕りも好きだし、山の山菜採りは好きだし、なあんでも趣味あった。ああ、魚捕りは好きだあ、好きだ。釣りも、網打（ぶ）ちも。あれ、にわか雨降っちゃ？ ああ、網たがってね、川さ駈（はし）えでくんだった。また捕れんだもんね。

で、てえげえの物、自分で何いでも作（つく）ったの。ご飯炊ぐ釜の台だり、鍋の蓋だり。まあず、ほゆのは好きだった。

うん、山案内もしたよお。山菜採りでもいいし、川さ行くのもいいし。仕事休んでまで案内したんだおん、川でよし山でよし。だから、山さ嫁（い）って、なんもなんねえうち、「働（はだら）いで食べねけねえもの、そんなにしでたら駄目だべっちゃあ」なんつったけども、やっぱり人を助ければ、恵み、巡り会いあつてね、ほんなに苦労と思わねかったね。誰かれ訪ねるの、順繰りに、つぎあいつぎあいつて口伝えでいってね。うん、にぎやかだったね、日曜つうとは、まあず一日。毎週、誰か彼かね。飲む人だったから、何時（いつ）でえもいんだおん、酒は。んだけつどほら、あのなんつうの、酒癖悪い人いっちゃ？ その人と仲間（なかば）るのは嫌（や）んだ人だったの。

んだからあれだっちゃ、亡くなった時なんか、えらーい人だったんださあ。まあ、ほゆう人だったはねや。

(『升沢にくらす』 p.275)

縄のない方 炭スゴの編み方

嫁入前にござ来たこと、全然(じえんじえん)、私はねえの、はしめてなの。嫁入は、トラックだったんだから、おれは。トラックの運転席で、「どこまで行ったら家あんの」どって、泣あいだ。

山さあって苦労は、木い背負いね。やっぱり家にいだとき、木い背負いなんかしねえっちゃ。炭背負いだとか。あと、縄ない、すご編み。縄なうって、ないよう分がんねえから、おれ、うっんど撚りかけて、なってしもからは、拵(ひしょ)げだとき、クリクリーンと八の字になるわけ。スゴ編みも知やあねえから、ほれ、こうカヤ、こっち側さ出だごったらあ、こう、すぐに折るわけ、おらだちは。ほいづ、こっち方(ほ)の人たち、こゆふに二度折って、角っこ付けんの。ほしでこんど、こっちはこいつが、うんど詰まっては。みんなが、角を付けっからあ、大っきいわけっさ。角付けねえでそのまま折るからあ、ちゃっこいわけっさ。

(『升沢にくらす』 p.246)